

3 ほ乳類モニタリング調査

赤谷プロジェクトでは、生物多様性の復元を進めるに当たり、森林の取扱い手法の調査・研究や大型猛禽類を森林生態系における指標種としてモニタリングを続けています。

ほ乳類モニタリング調査としては、①ホンドテンモニタリング調査、②ニホンザル行動圏調査、③ニホンツキノワグマの観察調査、④カメラトラップを用いた動物相調査等を実施しています。

(1) ホンドテンモニタリング調査

生物多様性の復元をほ乳類の視点から評価するために、中型ほ乳類であるホンドテン（以下「テン」）を設定し食性の調査をしています。調査内容は、具体的には林道等にテンが排出した糞をサンプルとして回収し、内容物等の分析をしています。

テンを選定した理由としては、①行動圏が数～数十haで林小班単位的环境変化と密接な関わりがあること、②河川、山地など平面的な広がり、他、樹上という3次元の活動範囲を持つこと、③食性が植物から動物まで非常に幅広いこと、④全国の広い地域に分布しているため他地域との比較ができること、などがあります。

テンは大型猛禽類のように生態系の頂点に立つ種ではありませんが、森林環境の状況把握する有力な指標として活用するため、サンプル数の蓄積と分析を進めています。

サンプリング調査は、サポーター活動とプロジェクトの調査が密接にリンクしており、サポーターによる調査が非常に重要な部分を占めています。



サポーターによるテン糞のサンプリング風景



夜のテン

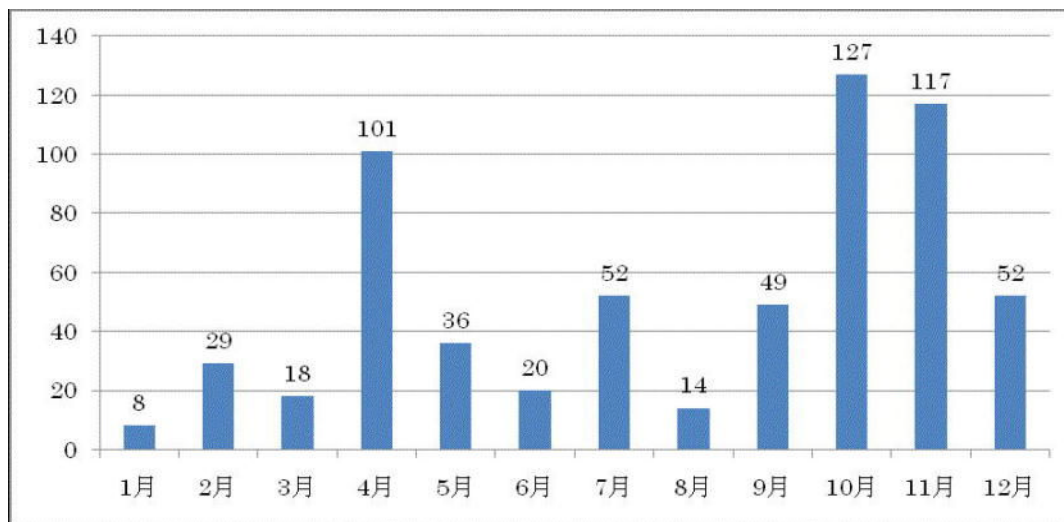


テンは目立つ場所に糞をする習性があります

平成21年度（ここでは、平成21年1月～12月が該当）で現地調査は5年目となり、通算総サンプル数は2,779となりました。今年度のサンプル総数743、うち有効サンプル数689、テンが623でした。

月別サンプル数は下図のとおりです。

月別サンプル数



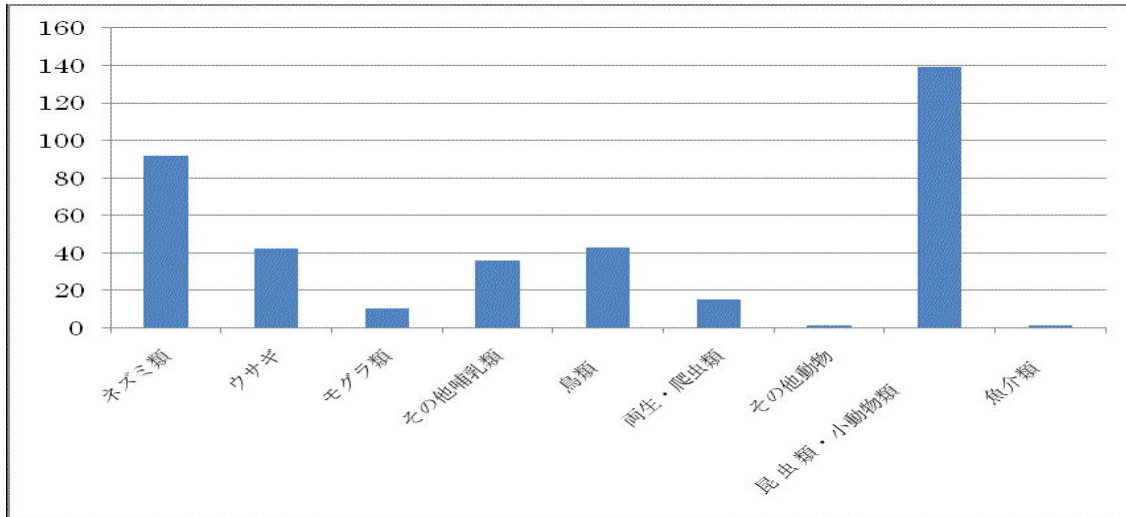
採餌動植物としては、例年、3～8月期は動物類が優占、または、やや多い状態が続き、9～10月期になって植物がやや多くなり、11～12月期には植物が優占する傾向にあり、平成21度についても、ほぼ同様な形となりました。しかしながら、1月と3月で動物類が例年になく高い比率を示しました。

月別動物食と植物食の比率



採餌動物類は、ほ乳類と昆虫類に集中していました。ほ乳類と昆虫類の月別採餌状況に着目すると、ほ乳類は3～5月と7月に小さなピークを持ち、昆虫類は7月と10月に多い結果となりました。

採餌動物類の出現数



平成21年度の採餌植物は、サルナシ、オオウラジロノキなど22種で、例年と同様サルナシが突出していました。今年度は、オオウラジロノキの実付きが良好だったようで、積極的に採餌されていました。季節的な観点から見ると、冬季から春季にかけては、オオウラジロノキを中心にツルウメモドキが少し採餌され、7月にヤマグワが見られ、9月から12月はサルナシが優占する形となりました。例年では、冬季はツルウメモドキが優占するところですが、今年度はオオウラジロノキに置き換わっていました。

採餌植物類の出現数

